

「学問のすすめ」

中学二年 M・K

私の家はもうすぐ引越しをするので、色々な仕分け中の荷物が散乱している。母が本棚を片付けているようだ。福沢諭吉の「学問のすすめ」が転がっていた。何てつまらなそうなお本だろう。そういえば姉が中学生の時に読んでいたっけ。どんなつまらないことが書かれているのか気になって手に取ってみた。

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」この本の冒頭に出てくるくだりだ。このくらいは私でも知っている。しかし私はこの後愕然とする。私は明らかに勘違いをしていた。私はてっきり、人間は皆平等で能力に格差はないのだから皆さんがんばって勉強しましょう、という話かと思っていた。しかし違った。諭吉は言っている。人間は確かに生まれた時は平等だが、その後の人生で賢い人、愚かな人、貧しい人、金持ちの人、社会的地位の高い人、低い人、幸せな人、不幸な人、こうした雲泥の差が生まれるのは学ぶか、学ばないかの違いだと。学ばない愚かな人間が沢山集まれば、国家をも揺るがす一大事になることもありえると言っている。恐ろしいことだ。独裁政治や戦争は偶然が重なっておこるものではなく、学問の欠落が積み重なっておこるものだ。人間が生きていく上で身に降りかかる不幸もまたしかり。まず、私は学問というもののとらえ方を間違っていた。学問とは机上でする勉強の事だと思っていた。私は勉強が大嫌いだ。小学生の頃、私は勉強をするのが嫌なので中学校を卒業したら職に就こうと思っていた時期もある。しかし諭吉の理論ではそんなことをしても何の意味もないことになる。それどころか、一生小さな世界で他人を羨み、独立も出来ず、虫けらの様な人生を送る事になるのだろう。諭吉の考える学問の趣旨は「人間たる者は、ただ自身と家族の衣食を得ただけで満足してはならない。人間にはその本性として、それ以上の高い使命があるのだから、社

会的な活動に入り、社会の一員として世の中のためにつとめなければならぬ。学問をするには志を高くしなくてはならない。飯を炊き、風呂を沸かすのも学問である。天下の事を論じるのも学問である。けれども、一家の世帯は簡単で、天下の経済は難しい。およそ世の中で、簡単に手に入るものにはそれほど価値はない。物の価値というのは、手に入れるのが難しいことによるのだから。」

今私が学校で学んでいる事は学問ではないようだ。学問をするための準備とでも言おうか、学問をするのに必要な道具を揃えているようなものだ。学問を身につけたその先の事はまだよく分からないので、今自分がやるべきこの準備の事について書こうと思う。諭吉の考える学問に必要とされる常識が多々紹介されているが、意外な事にそれらは私が幼い頃から家族や学校の先生方に言われ続けている事が多い。きちんとあいさつをする、身なりを整える、無駄遣いをしない、他人をうらやまない、コミュニケーションをとる、自分の気持ちを上手く人に伝える、自己満足をしない・・・これらの事は少し気を付けて常に心のどこかで意識していれば、私でも何とかなりそうだ。しかしただ母から一言、命令口調で言われるより、そうすることによるメリット、しなかった場合のデメリット、色々な事例などが論理的に説明されていてとても分かりやすい。それよりも、私に決定的に欠けている点が二つ見つかった。私は人、周りに流されやすい。自分で判断する勇気がないせいかもしれない。事物をよく比較して、信ずべきことを信じ、疑うべきことを疑い、取るべきところを取り、捨てるべきところを捨て、それをきちんと判断するというのは、なんとも難しいことだろう。諭吉もこの難しい問題を解決できるのは学問をするしかないと言っている。学問をする者はがんばらなくてはならない。もう一つは、諭吉の毛嫌いする蟻のような人間に私になってしまっているということだ。テストの点が悪くても終わってしまえば気にしない。宿題は形だけは出す、呼び出しなどされて大好きな部活に行けなくなったら一大事だから、中身の質など気にしない。家に帰ったら、明日困らない程度に一通

りの事を形だけ済ませ、ラインや動画を見て楽しむ。やらなければいけない事が沢山あるのはわかっているのに、蟻はやらない。蟻でいるのはとても楽なのだ。しかし、諭吉に「虫けら同然のバカ」とまで言われたので、この際蟻をやめる努力をしてみることにした。実は私は薄々自分が蟻だということに気づいていた。漠然とした疑問を抱いている時に、たまたまこの本を見つけたのだ。この夏広島は豪雨による土砂災害に見舞われ、大勢の方々が亡くなった。その少し前には熊本で大きな地震があった。一番被害が大きかったのは東日本大震災だろう。私はまだ幼稚園児だったがあの時の恐怖は今でも鮮明に覚えている。人間生きていけば自分に非がなくてもどうしても避けられない災難に見舞われることがある。小さな災難、自分の過失による失敗を含めれば何事もなく一生を送れる人などいないのではないか。東日本大震災の後、テレビを見ていたら風評被害を受けた福島のキャベツ農家のおじさんが「もううちのキャベツは売れない。皆さんは頑張ってください。」と遺書を残し自ら命を絶つたと放送していた。まだ幼かった私だが、あの時の衝撃は今でも忘れられない。死ななくてもいいのに、幼心にそう思った。私だって明日交通事故に遭い片足を失うかもしれないし、親が病気になって亡くなるかもしれない。絶望の闇の中に落ちてしまった時、諦めてしまふのか、泣きながらも次の道を探すのか。私は後者でありたい。そんな時、きつと学問は役に立つと思った。

知識や教養を身に付けるだけでは学問を身に付けたことにはならないと諭吉は言っている。その知識や教養を使って、試行錯誤を繰り返しながら実践で使えるようになって初めて学問を身に付けたことになるのだ。やはり私は蟻を卒業しようと思う。そして学問をするための準備をしたいと思う。自分も幸せになれ、周りも幸せにし、社会の役に立てるなんて、そんな嬉しいことはない。私がもしも災難に見舞われた時、どんなに辛い状況下でも自分の足でまた歩き出せるように。また、そんな状況下にある私の大切な人たちが諦めることなく一緒に歩き出せるように。

たまたま手にしたつまらなそうな本が、私に色々考えるきっかけをくれた。この本が明治初期のベストセラーだというのは知っていたが色褪せた感じは全然しない。今も昔も人間のやることはあまり変わっていないのかもしれない。

\*参考文献…「現代語訳 学問のすすめ」 訳者 齋藤孝

筑摩書房 二〇一一年七月二十五日発行